

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	片意地な男の手紙 : 小説
Author(s)	船越, 巧
Citation	龍南, 207 : 88 - 97
Issue date	1928-11-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/9017
Right	

片意地な男の手紙

船越巧

暑い天氣だ。四疊半の暑氣が俺を窒息させさうだ。精神も肉体も倦怠を感じて居る。俺はこんなぐずぐずした生活はいやになつて居る。昔と今とは全くちがつた意味で俺は現在の飽き／＼した怠慢さがいやになつて居るのだ。

「いつ迄も待つてやるんだ」とあの女が別れに來た時、心にいつてやつた男の意地からでも、俺は待ち續けてやるつもりだつた。忘れ難い女のヴィジョンが懷しさをとほりこして憎い程、俺の心の一隅を占領して愛くるしい顔を見せては、にっこり一年前の笑を浮べる。俺は當時氣も狂ひさうだつた。そして氣も狂ふ程思ひ續けた。

若い者に臆病とはにかみとは禁物だ。人間が程度を越えて自己を抑へる時には決していゝ事は生じない。それは彼にとつてのみ癒し難い失望と悲慘とを齎すばかりである。然し俺はもういつ迄もく／＼身を悲しむで居るにはあまりに長かつた。俺自身悲しみと失望と落膽そのものだとか考へた程だつたのだから。

俺は再び故郷には歸るまいと思つた、然しわけも分らない老ひた母親に分れて居るのはつらいものだつた。母は頻りに俺の歸郷を待つて居る。俺は全く故郷の田畑を賣拂つて此方へ引きこす事をすゝめた事もあつたが、母の悲しみを見るに見かねて強くもいへなかつた。母には故里の山と海の間で靜かに一生を送らせてやりたい。理解のいく年であるならばと思はぬ事もないが、俺自身の事ばかりを考へるのもあまりに可哀想である。

俺お前の間で大きくなつた俺達だ。お前を除いては、俺のこの心情を理解してくれる者は一人もないのだからな。世の中の人

間は俺の事を馬鹿だといふかもしれない。人一倍片意地な男だとは自分でも思つて居る。故郷には女が居ないではない。然しあの女は一人しか居なかつた筈だ。俺は女の事をたやすく考へたくない。この事だけでも世の中がどれだけ多くのものを不幸にして居るかしかない。

俺には今でも人の事をいふ氣にはなれない。いふだけはいつてしまはなければ。許してくれ、お前の忠告もかへりみずに、あの女の事のみ考へないでは居れなかつたのだ。それ程あの女は俺の心に強い痛手をなげつけて行つた。

幼な友達で暮して居る時にはちつとも彼女を異性だとは考へない程俺は無差別に親しかつた。中學の年頃になつても、俺達はやつぱり往き來もし、戯れもしてちつとも不都合を感じなかつた。然し長い間の俺達の平和が彼奴の出現によつて亂された事を痛く思ひ出さずには居れない。彼奴とは彼奴の事だ。推量出来るだらう。唾でもはきかけてやりたい氣持がする。

俺は何かの豫感からか、初めてあつた時から、憎々しい程いやな奴と思つた。彼奴が女を俺から奪つたといふ事がなくても俺は憎惡を感じて居ただらう。彼奴がなれ／＼しく俺達の間に這入つて來てから俺はひけめと嫉妬を感じた。それはお前がよく知つて居てくれた事だ。その頃から俺はあの女に對する關係がはつきりと單なる友達以上のものである事を知つた。

俺が全く臆病ものであつた事を告白しなければならぬ。勇氣が欲しかつた。あの女の心は知らなくとも、俺は勇敢に打ちあけなくてはならなかつたのだ。而も俺が俺等の間が友情以上である事を欲した時、俺はもはや平然としてあの女の友達である事が出来なかつた。あの女が俺の許に來ても、俺は表面冷然として彼女を見た。さうあの女も亦感じた事であらう。俺はその時の氣まづさをはつきり思ひ出す事が出来る。俺は自分の心にわだかまりとひがみを感じる程の頑さをもつた。そしてあの女が淋しさうに歸つて行く後姿に溜息をつかなければならなかつた。

女は往々少々の愛よりも外觀にひかれて行くものである。彼奴は村長の甥で大學生だつた。俺は中學生にすぎなかつた。俺は女の淺薄さを思ふ。虚勢の下では女は全く個性なしといつてもよからう。虚勢といふものを識別する能力を缺いで居る。あの女も純な處女であつたけれど、結局は虚榮にとらはれてしまつたのだと俺は思ひ込んで居た。

戀愛は冒險であるとしてよく目にする。冒險心のない事を以て臆病だとするならば、俺は黙つてその名稱をうけなければならぬ。俺の心に一片の影をなげ去つた過去の女は彼女のみではないが、あの女の如く俺の心をとらへたものはない。俺には、戀を得る機會が今迄になかつたといふのではない。而も俺は臆病者であつたとも一度お前と過去の女の前に頭をたれる變な勇氣をもつて居る。然し俺はいつも自分のはにかみに對して、戀愛の眞の樂しさは胸にひめた苦悶の中にあるなどと氣やすめの解釋をなして居た。笑ふ可き事だ。それでどれだけの力を得たのか、それによつて何のかちうる所があつたのか。

こんな氣やすめは今の俺にはあき／＼して居る。氣やすめの中毒患者のやうな生活はいやだ。俺は時々自分の頭をグワンとなくつても見たい、氣狂ひにでもなりさうな氣持がして居たのだが。近頃は餘裕が出て來たやうである。あの頃の氣持も冷靜に考へて見る事もある。あの女が、結婚してから、俺の所に愈々お別れに來た時、坊主憎ければ袈裟迄の感じに似たものがあつたけれど、全く俺の所を去つて行く時には悲しい思ひがしたよ。あの女に對する憐憫もあつたけれど、俺自身が可哀想でならなかつた。俺のなまあた／＼かい涙が頬をつたつた時、あの女の目からも涙がはら／＼おちつたのを知つて居る。何を意味する涙だつたのかしらん。俺は大きな高島田に向つて、「いつ迄も待つて居るよ」と心の中でいつてやつた。俺は彼女の結婚を祝福するといふよりはのろつてやりたい氣持で長い間すごして來たが。

故郷の母が、お前をとほして書きよこす手紙を見る度に涙がこぼれる。お前の忠告も有難く感謝して居る。いつも／＼返事も出さずに失禮した事を許してくれ。生來の筆無精の上に特に故郷の事は出來るだけ忘れたかつたものだから。然し母に宛てた手紙で俺の消息も知つてくれただらう。

俺が、ひよつと思ひ立つて書く事にも、また俺の生活狀態が變りつゝある事にも不思議にお前は思ふだらう。如何してだらうと思ひはせぬか。何の理由もない。手すさびにお前とよく書いたあの女の素描をとり出して、繪筆をとつて見たら妙に氣が輕くなつて來てお前に書きたくなつた迄の事だ。氣が輕くなつたといつても、あの女を忘れ去つたのではなく、また俺がいつも彼女に對する執着から壓迫されて居たといふのではないらしい。寧ろ俺の片意地な性質と情性からではなかつたかと考へて見る餘裕

が出来て居る。

夏休みには一度歸郷して見たい氣持がしきりにする。どうなるかわからないが。母の所にも行つて慰めてくれ。御機嫌よう。

襄一は急に軽い氣持になつて來た。純な昔のあの女に對する氣持がかへつて來た。故郷の二階で涼しい海よりの氣を吸ふたやうな清さを覺えた。女に對する意氣地から來たわだかまりに似た氣持がさりとされてしまふ程、すが／＼さと重苦しさからの解放とを意識した。あの女の昔の懷しみを繪にしたい！その幻を捨ててしまふにはまだ何故かあまりに惜しい氣持があつた。時にはそつと懷からとり出しては見たい氣持があつた。

襄一は二年間といふものこんなに晴々した氣持はしらなかつた。それは彼の性質に基く陰鬱性と女の結婚に對する憎惡と愛慕とのごつちやになつたものによるのであつたが、あの女に對する初めの憎しみが他の一般の女に迄嫌惡を感じるやうになつて變らない今でもあの女に對する憎しみは疾くの昔に消えてしまつて、彼女に對する愛着と、己れ自身に對する淋しみとのみが強くなつてゐたのであつた。

永い間見向きもしなかつた女の繪がかうも彼をこの時に限つて、とりわけ憂鬱から救ひ出さうとは考へられない事であつた。時々彼の目前に浮んで來て惱ました煩笑みが全く昔のあどけなさにかへつて居た。淋し味はあつたけれど、色々な四つ切が構圖を考へて居る彼をして獨りでに煩笑ませた。

描かう!!毎日學校からかへつては、勉強もそこ／＼思ひ立つた仕事に熟中した。繪は中學時代に先生についたのみで、我流といつた方がよかつたが、繪も好きだつたし、いい手筋を持つて居た。繪が好きで、自分でも爾などをよくかいた父親が死んでからは、中學時代すゝめられる儘に行きたいと思つて居た美術學校をやめて、母の希望どほりにした程であつた。

製作が出来あがつた時、小さいながらも、努力の疲れにほつとするのを覺えた。杜翁が復活を書きあげて後ゲツソリ衰弱したとかいふ話を思ひ出して、彼も満足を感じたい氣持だつた。繪具板や繪具のとりちらされた儘の中に坐り込んで、うつとりと

自分の製作の前に涙ぐましい女の頰笑をよく浮べて居た。

題は何とつけよう。忘れ得ぬ女の顔ーいや、もう少し奥床しい題をつけたいなどと考へながら、數日の間は額縁を選んだり、光線と懸け場所の事など工夫して見たりしたけれど、氣に入る事も思ひつかかなかつた。秋にひらかれる記念祭へ出品したらとも考へたけれど、自分の戀人の顔を人の前にさらしたくもなかつた。唯自分の氣の赴く儘に書いたにすぎなかつたので、人に見せようなどとは全く思つて居なかつたけれど、自分を棄てた女を側におくのは、考へて居るといふやな氣持がして來た。

よい題名は出て來なかつたが、疲れた儘横臥しながら、頭に浮んだのは、ままごとする時によくしたあの女の姉さんかぶりである。

過去の思ひ出！

もし之をあの女に送つたらどう思ふかしらん？捨てがたい女に對する興味と皮肉とが、考へるとすぐやつてしまはなければ居れない性分の彼を動かした。後から悔む事も屢々あつたが。

おちゃん。

突然に手紙をさしあげる失禮を許して下さい。お別れしてから二年、故郷に年老ひた母を残して二年、遅い遅いと思ひながら經て見れば隣り間のやうな氣持がします。過去がなつかしい。あなたの昔し名を以て呼ぶ事が無厭ならお許し下さい。然し私にはそれこそ何に比べやうもない懐しい名前である。私はその故に故郷をも捨てようとしたのではない。

全く突然にこんな突飛な事を書き出して何をいつて居るのだらうと大きいおちゃんは思ふでせう。全く自分でも書く氣になつたのが突飛なのです。出来るなら故郷の一切を絶ちたいと考へて居ましたけれども、それは私には出来ない事です。幼い時のおちゃんと歩いた海邊やまゝごと遊びの思出迄も忘れて了いたいと考へたのです。けれど私は一切と斷つ事は出来なかつた却て私をして寺の森の松籟も海のざれ波もより強い執着を感じしめたのです。そして之等の事は全く普通の事を書いて居るのです。

結婚生活は過去の事を忘れしむるさうですが、Cちゃんは幸福の事と思ひます。故郷の昔を記憶してあるかしら。勿論時々には海をわたつておかへりの事でせうが。あの頃讀んだ啄木の歌を覚えて居ますか。「故里の彼のみちばたの捨石よ、今年も草に埋もれしならん。」感傷的な氣分にとらはれ勝な頃、好んで讀んだ彼の歌の中、今では望郷詩人としての彼のものが最も私の心をひく。

私は嘗て女性憎惡に陥つて居た程であつた。遠慮なくいさせてもらひませう。女性は無類にも値しないものであり、女性には果して個性があるものだらうかと考へた程でありました。女は瞬間の生活しかしないものであり、彼女は自分の限られた範圍を越えた向ふのものは、例へそれが小さからぬものでも忘却してしまふものだと思つて居ました。

大きいCちゃんは過去を記憶して居られるかしらん。記憶して居られなくとも思ひ出して下さるかしらん。否回想する事に對しても、大儀を覺えられるかもしれぬ。こんな事をかく無様を許して下さい。

眞の理解のない結婚は女性を馬鹿にする者ではないでせうか。大抵の場合男は性的欲望の満足のために女を娶る。こけおどしに女を手ごめにあはせて漁りあるくのが卑しい男の群です。彼奴等がどんなに虚勢をはつても内の備はらない獸にすぎない。弱いくせに金の光で胸をはつて見せる。女は彼奴等の道具となり終つて過すのが満足でせうか。

大きいCちゃん

何故私が、こんな事をかく分つてくれますか。まあ、そんな事はどうでもよい。いひ過ぎがあれば許して下さい。幼友達のCちゃんにかいて居るつもりで居るのですから。

急に思ひ立つて私はこの記憶畫をかいた。然し書いた事は書いたが、私の側においておく事がいやになつたのでお送りします。そして大きいCちゃんの若い時の頰笑のあどけなさをよく見覺えて居て下さい。

私はCちゃんが高島田でお別れに來た時、とり亂してすっかり忘れて居たものが一つあります。この畫題の「過去の思ひ出」と心の誓ひと、あなたに左様ならんといふ事を。それが消えがたい事を知りつゝ。もう一度、さやうなら。

襄二は愈々別れの手紙を出してしまつたら、何かしら心もとなさを覺えた。そして待たないやうで反響を待つて居たが、何等の返事もなかつた。

それから後臆劫な彼が故郷に歸つたのは舊の干蘭盆の頃であつた。七時間もゆられた汽車を降りて自動車を捕へた。古ぼけた馬車の時代におくれつゝあるのろあしが、痛手をかくして故郷を出た頃の苦しさを思ひ出させる程、痛々しかつた。

その日まであかるい間に故郷についた。波止場のすぐ近くに新しい宿屋が二軒建てられて居た。名前は忘れて居たけれど、顔だけは見知つて居た一方の宿屋の娘が挨拶をした。彼はこくつと腰をまげて、人目をさけるやうに、海邊を急いだ。後できくと港を中心とした海水浴の人々が休暇を利用して避暑に來るのださうである。

彼の故郷は周圍が三里ばかりの島であつて、港から船で五六浬の所にあつた。南向いて小さな町が海岸に沿ふて居つた。波止場から波止場迄僅かな距離しかなかつた。彼の家は町の真中程に海岸に近く立つて居て、海からよく目當てとなつた白壁がくつきりとして居た。

大部すりへらされた石壇をあがりながら、彼の心は久し振りに會ふ母の喜びを想つて躍つた。

戸口をはいつて靴をおきながら「お母さん」と呼んだ。もう一度呼んだ。そして裏口の方へにはをつつきつて行つた。炊事をして居たお菊さんが彼を見つけた。

「まあ、叔母さん、襄二さんがかへつて來ましたよ」とぬれ手を黒い前掛でふきながら、小走りに走り出て井戸端で叫ぶのが聞えた。

「襄二が？まあ、襄二さんかい。一話しやめながら、むきかへつていつた。一もうかへるか、もうかへるかまつて居たのに、あまりおそいから、今年もかへつて來ぬのだらうとあきらめかかつて居た所なのに。よくかへつてお出でたね。一寸しらせてやれば迎へに行くのに……」一氣にうらみごといつてしまつて、にこ／＼して居た。彼は母の話の相手が誰かを認めて、先手をうたれたやうにどきつとした。

「襄一さん、お久しぶりです」と、ちゃんは母の側から挨拶した。彼は黙つて禮をかへした。

「まあ、おあがり、〇ちゃんもどうだね襄一もかへつて來た事だし、お話して行つては。」

× × × ×

浴あがりにかかへて後、ゆつたりと食事をとつた。母子が一緒に食膳についたのは二年振の事で年老ひた母親がうれしそうに給仕をしてくれるのが涙ぐましかつた。めつきり白くなつた髪の色が母の嬉しさうな顔に餘計さびしさを加へて居た。二人の姉が死んでしまつてからは彼が唯一人の頼りであつた。彼が故郷を決心してたつた時、ひきはらつて一緒に行つてはとすゝめたけれど、先祖の祭をかがしてはお父さんにすまないといつてとどまつたのであつた。

彼があちらに行つてからは、母はお菊さんと一緒に過して居た。お菊さんは彼の従姉妹で小さい頃から彼の家を家のやうにして、あるいて來ては彼と遊んで行つたお轉婆娘であつた。近頃はお菊さんが少し淋しさうにし出したなどと母が書いてよこして居た。

彼と〇ちゃんとの間にはしつくりしなかつたけれど、お互に安心に似たものを感じあつた。そしてひかへめではあつたけれども、四人がつゝましい食事を認めて、母と彼は石垣の上に床几を持ち出しながら、旅のつかれも一緒にのんびりとした氣持になつた。無理に手傳つた〇ちゃんもお菊さんも後始末を終へて、一緒に團扇片手に床に憩つた。海岸から吹いて來る夕風も涼しい。バタ／＼と蚊を逐ふ團扇のひびきが猶更に涼しくした。天の川が東西に薄白く棚引いて居た。うすぐらい港の向ふのK O 島の上から、赤黒い月が出はじめて居た。母の膝を枕にしながら、姉と共に月や星について、長い頼ひげをはやした父の話をきいた幼い頃が限らないゆとりと哀傷とをあたへた。

「お母さん、こちらでひとりでさびしいでせう。あちらへ行くやうに思ひたゝれてはどうでせうか。お菊さんもこんな田舎にはいつ迄も居りたくないでせうし。……」母は氣のない返事をして居た。母はあまりはづまなかつた。銘々優しい静けさの中に呼吸して居た。

「ほんとにいゝお月さまだよ。今夜は」

「まつたくよい月ですね。久しぶりに見る海の月はまた格別ですよ。」

都會のものには一度見せてやりたい景色だつた。渚から沖の方迄金色に波がゆれて、ジャブ／＼満潮が細かな音たてゝ居た。向ふの波止場の突端にある電燈の影が長く波にゆれて居た。

「襄二さん、居なさるか」とKが垣の下から聲をかけた。「今日は疲れなさつたらう。そこであんたが來なさつたときいたもんだから、すぐやつて來たですたい。おばさんも今晩は……」

「今晩は。今日はひよつこり襄二が歸つて來たもんですから、びつくりしてしまいました。それかといつてしか／＼話相手にもなつてくれませんほ。……」母は淋しく笑つた。

「襄二さん。久し振りだから、時々は集會所へ遊びに來なさらんか。若い連中が遊んで居りますからな。」

「うん、あんまり人に顔あはせたくないだがなあ」

「また二三日して來う。盆前で急がしいものだから。お母さんも左様なら。」「左様なら」

その晩彼は是非かへるといふ女をお菊さんと送つて行つた。その歸りに濱邊をとほりながら、お菊さんは色々ちやんの身上話をきかせてくれた。

ちやんが不承々で嫁いだ事や、嫁いであらすぐ様男は女狂ひに出かけては家をあけつばなしにしたり、夜なかに女をひつぱつて來たりして、仲々苦勞したりしたらしい事、そして心勞がすぎて近頃は胸の病を少しやつて居るらしい事、今度の盆に里がへりをしたのは離縁になる決心らしい事など話してくれた。

彼はこんな話をきくと憎めなかつた。そして力弱い女に對する同情の念が起つて來るのを禁じ得なかつた。あの女が別れに來た時に流した涙がまた思ひ浮べられた。彼が愛着を感じながら友情を越えてはつきりした形をとる前に彼女の結婚は進んでしまつて居た。もし彼女が自分を愛して居たとするならば、彼女を結婚させたのは自分にその一半は責任がないであらうか。結局自

分達の戀は移り氣な程弱かつたのだらうか。

襄二はその後屢々女と話しあつた。散歩に出てよく船縁に腰をおろしながら泌々話しあつた。彼等の間には暖い愛の芽が鱗をやぶつて萌えて來た。女に「左様なら」といつてやつた言葉は女の心をとらへて愛着を起させた。幼い頃の頼笑は彼女をして昔を思ひ出させた。彼等はお互に熱して行つた。悲しみの涙は却つて彼等の間のわだかまりをといて行つた。女のやつれが消えて行つた。母親はこの幾日の間に襄二が昔のやうに生々しくなつたのを、何も分らずに喜んで居た。

彼は自分が童貞を失つた事に對して何等の悔を感じなかつた。却て何か見えない能力が彼の心身にはたらいいて、彼を躍動さすやうに覺えた。

彼は舊盆をすませて、母のとめるまゝに、一日一日と歸りの日を延した。然し愈々の日となつて、母と、お菊さんと、ひちゃんは波止場迄見送つてくれた。故郷も之でお別れになるんだと思ふと悲壯な感じもした。母もお菊さんもひちゃんも涙を抑へて居た。

「お母さんもお達者で、決心してあちらへお出でになるのを待つて居ます。左様なら」彼は涙が浮ぶのを覺えた。「ひちゃん」心の中で呼びかけた。「行く所迄行くんだ」

白い鷗が船の行手で飛び交ふて居た。